

CBRC Newsletter 35

<http://www.cbrc.jp/>

連帯と英知の結集を



浅井 潔

(Kiyoshi ASAI)

生命情報工学研究センター長

この度の大震災の犠牲者のご冥福を心よりお祈りいたします。また、ご遺族にお悔やみを申し上げ、避難生活を送られている方々にお見舞い申し上げます。

今回の大震災と福島原発の事故は、連帯の重要性を改めて我々に教えてくれます。多数の犠牲者を出す一方で、献身的な努力と助け合いで多くの人命が救われ、困難に直面する人々への援助の輪が海外へも広がっていることに感動します。一方で、「確率は低いが高コストの危険」に対して、専門家の幅広い英知を結集した準備ができていたか、反省をする必要があります。戦後最大の危機に直面する我々が、再び平和と繁栄を心から謳歌できるかどうかは、これまでのシステムを根本的に見直し、連帯と英知の結集に成功するかどうかにかかっているのではないのでしょうか。

競争は経済活動や研究に不可欠ですが、行き過ぎは社会の効率を落とし人々を不幸にします。以前「近視

とミーハー」(31, 32合併号)と題して書いたように、研究投資における短期的成果重視や重点領域への集中が進んでいます。元々国の機関として公共の利益に貢献してきた大学、研究所、資金提供機関が法人化され、過剰なエネルギーが予算獲得競争や評価に費やされる現状は、このままで良いのでしょうか。

公的機関の法人化と同時期に、トップダウンの意思決定が重視される様になりました。私も含め、組織トップが行う意思決定の質は、十分な知識と経験に裏付けられているのでしょうか。専門知識のある人々の意見を集約すれば最善ではないと判明するような決定が行われていないのでしょうか。英知の結集ができないような官僚化したシステムを放置して良いのでしょうか。英知を結集するためには、我々の社会がどのような仕組みで運営され、どのような技術に支えられているか、そこに内在する危険が何なのかを、より多くの人に教育することも大切です。たとえ

ば、原子炉の仕組みを皆が知る必要はなくとも、放射能の危険についての科学的な教育は普段から行われるべきでしょう。

このような状況の中で、CBRCは2011年4月に10周年を迎えました。新しい場所(お台場)に、若い研究者が中心となって、生物学実験を行わないバイオインフォマティクス専門の研究センターとして設立されたCBRCのこれまでの歩みは、試行錯誤の連続でした。ご支援いただいた方々、共同研究者、職員、全ての関係者に深く御礼申し上げます。CBRCが得意とする新規アルゴリズム・ソフトウェアやデータベースの開発とその統合化、高速計算機を駆使したデータ解析やシミュレーションを含め、我々の技術から今後より幅広い連携が生まれることを期待しています。また、国内最大のバイオインフォマティクスの研究拠点であるCBRCが、研究・人材養成における連帯のハブとして皆様の英知の結集に貢献できることを願っています。